

年少4歳児

「おもしろいこと みつけたよ いっしょに やってみよう！（こどもまつり）」の実践から

1 活動のねらい

- ・その子なりにこどもまつりにかかわることを発想したり、これまでに経験したことから気付いたりしたことを遊びに取り入れ、工夫しながら遊ぼうとする。
- ・友だちに気持ちを寄せ、一緒にイメージを膨らませたり共感・共有したりして、こどもまつりの遊びをつくる。

2 保育の構想

(1) 子どものとらえと資質・能力について

本学級の子どもを以下の3つの視点でとらえた。

① 生活について

本学級は、男児9名、女児7名、計16名（うち3名9月より転入）の学級編成である。

1期、2期は園での生活習慣の習得に個人差が見られた。園での生活習慣を身に付けることが、一人一人が安定した園生活を送る基盤と考えた。そこで、個別に保育者が関わったり、学級での環境づくりを工夫したりした。園での生活リズムや基本的な生活習慣が身に付き、そのことが自信につながった。3期では、一人一人が自分の興味や関心に応じてしたい遊びを見つけ、意欲的に向かっている。自分のことだけでなく、友だちのことにも気持ちが向けられるようになってきた。

② 遊びへの取組について

築山で水流しをしていた年長児の遊びに触発されて、自分たちも「水流しをしてみたい。」と、雨どいを使っての水流し遊びを楽しみ始めた。築山での遊びの経験を生かし、砂場で雨どいを使っての水流しが始まった。そして学級のほとんどの子どもたちが関わり、水流し遊びを楽しんだ。その中で雨どいの組み方を工夫したり、「お寿司を流そう。」と同じ場で遊んでいる友だちとイメージを出し合ったりしながら遊ぶ姿が見られた。同じ遊びの中でも、「遠くまで水や寿司を流したい」「速く水や寿司を流したい」等、その日によって子どもたちの願いが変わっていった。「高いところから流したら、速く水が流れるかも」という発想からビールケースや木の切り株を探す姿や、「遠くまで水を流したい」という願いから雨どいをつなげる姿等、自分たちで必要な道具や用具を探してくる姿も見られた。

また、虫に興味をもって捕まえようと追いかけたり、捕まえた虫をどうするか考えたりして身近な生き物と触れ合う子どもがいる。室内では、空き箱や空きカップを使って自分がイメージした物を作ったり、それを使って遊んだりする子どももいる。園庭の環境を生かした木登りを、年長児や友だちがやっている姿を見て、自分も「やってみたい」「もっと高い所まで登りたい」という願いをもって取り組む姿も見られる。

このように、一人一人が自分の願いやめあてをもって遊び、同じ場にいる数人の友だちと一緒に遊びを楽しんでいる。

③ 人とのかかわり

学級の友だちに自分の気付きやしていた遊びを伝えたいという気持ちが生まれている。また、友だちの気付きや遊びに興味や関心を持ち、友だちに気持ちを寄せ、自分の遊びにも生かしていこうとする姿も見られる。友だちの姿から影響を受け、苦手だと感じることに對しても「やってみよう」という気持ちがもてるようになってきた。一方、友だちに自分の思いや願いを伝えようとしているが、お互いにうまく伝わらない時は、やりとりの中で折り合いを付けようとする姿もある。

運動会の活動から、学級のみんなで力を合わせることの気持ち良さを感じている。学年での活動や年長児との交流を経験したことで、遊びの中でも学級の枠を超えた関わりを楽しんでいる。

(2) 資質・能力をはぐくむために

この時期は、年少4期にあたる。自分の力を試す、工夫しながら遊ぶ、遊びを続ける等の姿や、それを土台にさらに遊びや場を共有する友だち数人とイメージや願いを出し合ったり、共有したりして遊ぶ姿を育てたい。

こどもまつりは、これまでに経験した祭りからお店屋さんごっこやショーごっこ等を取り入れた活動である。友だちとイメージを共有しやすい活動であると考え。友だちのアイデアを取り入れたり考えを出し合ったりして、やりとりしながら遊ぶことで、よりおもしろい遊びを展開する楽しさを感じて欲しい。

こどもまつりの活動に取り組んでいく中で、自分が思いつき、試したことを共有のこととし、それを糧に活動をつくれるようにしたい。そのために、子どもが友だちと一緒にやりとりをしながら遊ぶ良さを経験できるように、お互いのしていることを知り合わせたり、考えを出し合わせたりする。また、「友だちやお家の人に楽しい遊びを見てほしい」「自分が考えたことを友だちにも楽しんでほしい」という他者を意識した願いを持ち、遊びをつくり出し、楽しんでいく姿を目指したい。

活動を構想するにあたっては、「気付き・めあてをもつ姿」「発想し、試す姿」「共同・協同する姿」を資質・能力が表れている姿として以下のことを大切にしていく。

- 「気付き・めあてをもつ姿」については、園庭のドングリや落ち葉等の豊かな自然物や子どもたちがみつけてきた秋の自然物を利用して遊ぶ姿が予想される。自然物等を利用して遊ぶ中で、子どもならではの気付きや願いが生まれ、それを遊びに生かす姿が期待できる。子どもは、様々な素材に触れ、遊びに生かそうとする中で「きれいだな」「おもしろいな」「○○みたい」「○○にしたらどうかな」等と気付く。教師は、それに対する見通しや予想を受け止め、子どもの「こんなふうにしてみたい」等のめあてになるように結び付けていく。そのために、子どもの興味は何にあるのかを感じ取り、子どもの願いや考え等を価値付け、伝えていくことで、子ども自身が自分の気付きや願いを意識し遊びに意欲的に取り組むことができるようにしたい。
- 「発想し、試す姿」については、秋の自然物や様々な素材から子どもが自由に発想し、イメージを膨らませながら遊ぼうとする姿が期待できる。いろいろな方法や遊びに必要な物を見つけるためには、それまでの経験が影響してくるだろう。そこで、買い物に行くこと、ダンボール遊びをすること等意図的に様々な体験や素材を使った活動を取り入れていく。これまでの経験を遊びに生かそうとしたり、いろいろと試したりする中で自分たちの遊びに必要な物を

探したり、作ったりしながら遊びを展開できるようにする。

- 「共同・協同する姿」が生じるようにするためには、子どもが友だちの遊びにも関心をもち、一緒にやりたいという願いが芽生えてくることが大切である。そこで教師は一人一人の遊びを認めるとともに、友だちの遊びに目を向けられるように遊びの場や学級で共有する時間を設けたり、言葉でつないだりする。楽しさや嬉しさ、悔しさ等子ども同士の気持ちが伝わり合うように、タイミングを見て個々の思いを他の子どもへ伝えていく。また、子ども同士がやりとりしながら遊ぶことで、意欲が高まったり、遊びの幅が広がったりする姿を引き出すことをねらう。子どもが友だちの願いや考えを聞いたり友だちに伝えたりすることでイメージが共有され、それぞれの子どもが遊びの中で自分なりの役割をもって遊ぶことで、より遊びが深まっていくと考える。

3 展開計画

	ねらいと内容	◇願う子どもの姿
10月3週～10月5週	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な自然に触れ、遊びに取り入れたい、いろいろなことに気付いたりする。 <ul style="list-style-type: none"> ・園庭の木の实や落ち葉をみつけ、集める。 ・みつけた自然物を使って遊ぶ。 ○様々な素材に触れたり、祭りに関わる体験をしたりする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ダンボールを使って遊ぶ。 ・近所のパン屋さんに買い物に行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇夏の園庭との違いに気付き、秋の自然に興味をもつ姿 ◇秋の自然物を使って遊ぼうとする姿 ◇様々な素材に触れ、自分のイメージに合わせ、遊びに取り入れようとする姿 ◇お店屋さんごっこに興味をもつ姿
11月1～2週	<ul style="list-style-type: none"> ○祭りのイメージをもち、自分の思いやイメージを様々な表して遊ぶことを楽しむ。 <ul style="list-style-type: none"> ・お店屋さんごっこやショーごっこ、まつりごっこ等のごっこ遊びを楽しむ。 ・遊びに必要な物を考えながら作る。 ・一緒に遊んでいる友だちと、どんなことをするか等やりとりしながら考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇楽しいことやにぎやかなことをイメージし、やりたいことを考える姿 ◇具体的なイメージをもち、遊びに必要な物を作ろうとする姿 ◇自分の思いや考えを友だちに伝えたり、友だちの思いを受け入れたりする等、やりとりしながら遊ぶ姿
11月3～4週	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のしたいことを楽しみ、遊びの中で友だちとやりとりしながらイメージを共有していく楽しさを味わう。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いやイメージにあった物や場を作って遊ぶ。 ・自分の思いや考えを友だちに伝えたり、友だちの話を聞いたりしながら遊ぶ。 ○自分たちで作った祭りの遊びを、家の人や友だちにどう楽しんでもらうかを考えながら遊ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> ・お家の人に見てもらうことを楽しみにしながら、さらに遊びを進めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇友だちとのやりとりの中で、イメージを共有して自分なりの役割をもって遊ぶ姿 ◇自分たちで作ったものを試しながら遊び、より楽しめるように工夫していく姿 ◇いろいろな友だちや家の人にも遊んでほしいと、他者を意識しながら作ったり遊んだりする姿
11月5週	<ul style="list-style-type: none"> ○こどもまつりでお家の人や友だちに見てもらえたことを喜び、満足感をもちながら自分たちが終止感をもって遊びを続けていく（遊びきる）。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇こどもまつりを振り返って、自分が経験したことを言葉で表現する姿 ◇充実感をもちながら、自分たちの店や活動を満足するまで続ける姿

4 保育の実際

今回のこどもまつりの活動は、一人一人のイメージをつなぎ、共有するためのはたらきかけとして「さくら組のおもちゃ王国」と名付けて取り組んだ。これは、子どもたちの「おまつりは楽しいことがたくさんある」という思いから出たイメージである。イメージを共有することで、それぞれがしていたまつりの遊びが、学級みんなでするまつりの遊びにつながって進んでいった。

(1) 自分の発想を取り入れながら友だちと一緒にイメージを共有して遊びこむ姿

秋の園庭で子どもたちは「秋の宝物探し（秋みつけ）」を楽しみ、自分たちでみつけた宝物を使ってイメージしたことを実現しようと工夫しながら遊ぶ姿が見られた。

11月中旬、園庭に黄色い絨毯を敷き詰めたように、イチョウの葉が落ちていた。そのことに

気付いた子どもたちは、早速園庭に行き、イチョウの葉っぱで遊び始めた。ダンボールの中に葉っぱを集め、温泉ごっこをしたり、葉っぱをかけ合ったりして遊んでいた。その中に、葉っぱを手に集めて花束に見立てて遊び始める子どもたちもいた。

子どもたちがこれまでに経験したことが生かされている次のような様子が見られた。

園児A：「お花屋さんをしようよ。」
園児B：「うん。たくさん葉っぱを集めて作ろう。」
園児A：「できたお花はどうする？」
園児C：「置くところがあるね。そうだ。これをひっくり返したら？」
ピールケースを持ってきてひっくり返し、底が上になるようにする。
園児A：「いいね。」
T：「イチョウの葉っぱがお花になったの。すてきだね。《価値付け》花の置き方はどうして考えたの？《意味付け》」
園児D：「大きい花は、大きい穴のところ。この花はちょっと小さいから、こっちね。こうしたらいいと思う。」
T：「大きさを花を入れるところが違うんだね。」《価値付け》
T：「お店屋さんこんなお花が売っていたらいいな。」《力付け》
園児B：「さくら組のおもちゃ王国で（お店を）したら？」
T：「さくらさんみんなに（お花屋さんのことを）紹介する？」《力付け》
園児A B C D：「うん。」

教師は、子どもが束ねたイチョウの葉を花に見立てて遊んでいる姿を、発想力をはぐくむタイミングと捉え、その発想のよさを価値付けた。自然との関わりを楽しみ、豊かな感性を育てていくのではないかと感じた。さらに、花の飾り方や見せ方について意識が向くように言葉をかけることにより、学級で共有できる遊びへと広がっていくのではないかと考えた。そこで、学級の子どもたちにイチョウの葉っぱの花屋さんのことを紹介するように声がけをし、後押しをした。子どもたちと話し合った結果、「さくら組のおもちゃ王国」の中に店を開くことになった。保育室の中には、他にもいろいろな店ができていたため、花屋さんをどこで開くかを学級で相談し始めた（図1）。次のようなやりとりが見られた。

園児B：「このお花屋さんをおもちゃ王国でしたいんだけど。」
学級の子どもたち：「いいよ。」
園児E：「お店がいっぱいだよ。どこにする？」
園児C：「ここで、いいよ。」
保育室の中央付近に置く。
T：「よく見えるけど、本当にここでいいの？」《力付け》
園児F：「通る時にぶつかるよ。」
園児C：「じゃあ、外にする。」
園児B：「外は雨が降るかもしれん。」
園児G：「青いシートをかける？」
園児H：「ここ（テラス）でやったら、雨も大丈夫だよ。」
みんなでテラスに行く。
T：「本当だね。ここなら雨が降っても濡れないね。《価値付け》お花屋さんここはどう？」
園児A B C D：「いいね。ここにする。」
T：「みんなで考えたら、いい場所が見つかったね。」《価値付け》



図1

学級で話し合うことで、学級みんなで花屋さんのイメージを共有することができた。さらに、友だちの店についても考えようとする姿が見られた。友だちの遊びへの関心も、「さくら組のこどもまつりをみんなで作っていこう」という意識が強まっていった。

(2) 友だちと一緒にイメージを膨らませ、めあてを共有して遊びこむ姿

以前のダンボール屋さんの遊びで、「ダンボールの中に入ると温かい」ことや、「ダンボールは切ったり付けたりして形を変えて遊ぶことができる」ことを体験した。ダンボールに興味をもった子どもたちは、その体験を生かし、ダンボールを使い、組み立てたり、貼りつけたりし

て発想を広げながら「さくら組のおもちゃ王国」の入り口を作りはじめた。品物を置く棚や店の枠等イメージした物を実現しようと工夫する姿が見られた。さらに、友だちと共感、共有し遊びこんでいく次のような姿が見られた(図2)。

園児I：「おもちゃ王国の入り口を作ろう。」
園児J：「電気で棒が上がるやつにしようよ。(ゲートのバーをイメージしていると考えられる)」
園児K, L：「うん。いいね。」
電気がないことに気付く。
T：「電気で動く入り口にしたいんだね。《意味付け》
「でもねえ、電気が来てないんだよね。どうしたらいいかな。《力付け》
園児I：「手で動かす？」
園児J：「紙テープをくっつけて通るところにしよう」
T：「いい考えだね。これを通る人が上げたら通れるね。《価値付け》
園児L：「じゃあ、反対側にも柱を作ってつけようよ。」
紙テープにモールでフックを付けた物を作る。
フックを掛けるための柱を作ろうとする。
園児I, K：「柱が倒れてしまうよ。」
園児I：「もっとく？」
園児L：「テープで貼ったらいいんじゃない？」
園児J：「そこを押さえてて。」
園児K：「ここにもテープを貼るよ。」
園児I, J, K, L：「やった！立ったよ。」



図2

園児Iの「おもちゃ王国の入り口を作ろう。」という発想から、園児Jが出した「入り口」のイメージを友だちと一緒に共有している場面である。子どもたちは電動で動くバーをイメージしていたようだが、電気がないことに気付く戸惑っていた。イメージやめあてが友だちと共有された機会を、共同に向かうための援助のタイミングととらえた。教師は、子どもたちが発想し、試しながら友だちと一緒に問題を解決してほしいと願い、「どうしたらいいかな。」と問いかけた。めあてが明確になり友だちと共有されたことで、さらに子どもたちは、バーを手動で動かす方法や倒れそうな柱を止めておく方法を考え、何度も作っては試していた。最後には、自力でバーを作り、柱も固定することができた。子どもたちは、「友だちとしたからできた」という喜びと「友だちと一緒にだったから遊びがもっとおもしろかった」という思いを実感したことで、友だちとのかかわりを深めることに繋がったと考える。

入り口には「さくら組のおもちゃ王国」には何があるのかよくわかるように、店のポスターを貼る工夫が見られた。また、「一緒にやりたい。」とやって来た友だちも一緒に店に座れるようにと、店を大きくしていく姿も見られ、共同する姿に繋がったと考える。

5 おわりに

この度の実践により、遊びこむ子どもを育てるために、次のような視点をもって教師の援助を行うことが重要であると感じた。

- ・「資質・能力」の視点で子どもの姿をとらえ、その姿や場面に適した教師の援助「意味付け」「価値付け」「力付け」を選択すること。
- ・イメージやめあてを共有する場面や個の遊びが集団の遊びへと広がっていく場面では、「力付け」の援助が有効にはたらくこと。

今後は、上記の教師の援助についてさらに研究を深め、遊び込む子どもを育成するための有効な手立てを明らかにしていきたい。

(文責 石塚 のり子)